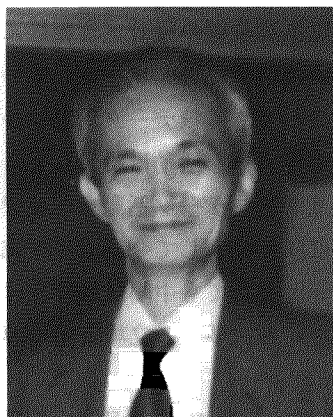


## 中嶋龍三さんをしのいで



去る5月6日、中嶋龍三さん(72歳)が亡くなりました。中嶋さんは、シグマ委員会ができた1963年からそのメンバーとして活躍され、日本の核データ活動の発展に尽力されてきました。ここに、仕事や個人的なおつきあいのあった方々が書かれた中嶋さんへの追悼文を掲載し、中嶋さんのご冥福をお祈りします。なお、紙面の都合で、執筆者の数を限らせていただきました。

(編集委員会)

## 中嶋龍三君を悼む

日本原子力研究所技術相談役

更田 豊治郎

中嶋龍三君の逝去を最初に知ったのは核データセンターの中川庸雄君からのEメールによってであった。それ程重体とは思っておらず、見舞いに行こうと思っていた矢先のこと、痛恨の極みである。中嶋君は私の2才年上であるが、昭和28年4月入学の新制大阪大学大学院理学研究科修士課程第1回生として同期である。

中嶋君は何と言ってもシグマ委員会(表裏一体で活動している日本原子力学会のシグマ特別専門委員会と原研のシグマ研究委員会を総称する通称)の最大の功労者である。シグマ委員会は日本の核データ活動協力体制の中心であると共に、核データ評価等の実際作業を行う多くのワーキンググループを抱える実動的な委員会である。昭和38年のシグマ委員会設立当初から原研を中核として、原子力関係企業等から有志の研究者が参加した。当時、協力が得にくい状況にあった大学からの数少ない参加者であった中嶋君(当時東工大)に、初代委員長の当時原研物理部長百田光雄先生が特に全幅の信頼を寄せておられた。中嶋君が米国NBSのウェイ女史(Dr. K. Way: 旧“Nuclear Data Sheets”を編集していたグループのリーダー)のグループに留学していた経験も買われていたと思わ

れる。日本がシグマ委員会を窓口として OECD/NEA の核データ委員会 (EANDC,後に日本の加盟を反映して NEANDC と改称) に加盟するに当たっても彼の寄与が大きかった。当時は前例の無いことばかりで、国際委員会に加盟することも、言わば手探りのアプローチで、色々な立場の人達の協力で実現しえたことであった。

核データを収集し、評価し、原子炉を始めとする原子力関係装置類の設計・運転等に必要データベースとしての核データ・ライブラリー (或いは核データ・ファイル或いは核データ・セット) を作成することに集約される活動の総称である核データ活動は多くの専門家のマンパワーを必要とする。仮に原研がこれまで核データ活動に投入してきた予算を 10 倍にしたとしても、原研だけでは今日のレベルまでの核データ活動を達成できなかったであろう。原研外からも多くの専門家が自発的に参加協力して今日までの成果を挙げることが出来たのであり、その協力のコーディネータとしても中嶋君の存在は貴重であった。彼は激しい気性を秘め頑固なところもありながら、多くの立場も違う専門家の協力作業のまとめ役としての魅力を持っていた。

中嶋君は平成 4 年 7 月からシグマ特別専門委員会の主査を務め平成 10 年 7 月に吉田正氏 (武蔵工大) に引き継いだ。平成になって時に酒が弱くなったのではと思わせることがあり、この 2~3 年それがはっきりしてきて年齢を感じてはいたが、お互い様とも思い、また彼は元々やせ型だが頑健さを感じさせていたので、さほど気にしていなかったことも悔やまれてならない。今になって思えば、靴下など自分では履かないなどという彼流ののろけなどを聞く仲でありながら、彼自身のことについて不勉強すぎた。幼年学校と一高の出身とは何となく知っていたが、幼年学校・士官学校・一高・金沢大学とはっきりつながったのは感慨無量だった士官学校同期生代表の甲辞によってである。彼がどことなく背筋の通った所があったのを改めて思いめぐらしたのであった。

中嶋君や私等の年代は多かれ少なかれ戦後の学制改革の波にもまれた。新制大学の第一回の入試も変則的なところがあったが、その 4 年後の新制の大学院発足時にも先生方の側に戸惑いのようなものがあったようである。中嶋君は金沢大学から阪大の大学院に進んだ。私は阪大理学部から同学の大学院に進んだが、中から進学しようとする私達には大学院の入試がどの様なものかぎりぎりまではっきりしなかった。先生に伺っても、特に入試勉強は必要なく、卒業研究を含めて現在の学業に励んでおればよい、といった具合であった。それを真に受けて、入試勉強らしいことなどしなかったが、試験が終わってみると、中からの者で大学院に進めなかった者も出だし、進学できた者達も押し並べて外から受験した人達よりも成績が悪かったとお叱りを受けた。もちろん、入試勉強は無用とのご指導だったことを言い訳にするのは恥だとは心得ていたつもりではある。すなわち、中嶋君は断トツの成績で進学したに違いない。中嶋君は伏見康治先生の研究室に属して理論物理を専攻し、私は浅田常三郎先生の研究室で 24MeV ベータトロンを手作りする下働きをしており、大学院生時代はあまり交流は無かった。私は昭和 32 年 1 月

に大学院博士課程を中退して日本原子力研究所に入所し、昭和 39 年に米国留学から帰国するまで中嶋君と接触はなかった。帰国して直ちにシグマ委員会に参加して、既にその中核的存在であった中嶋君と再会し、以来 36 年間、常にシグマ委員会を介する親友であった。長いシグマ委員会活動で、彼は指導的役割のみでなく、常に核データ評価を含む実際の作業に関わり続けたことも忘れられないことである。

原子力で先進国に追いつくことを、基礎的研究から自主的に取り組もうとの志の一環としてシグマ委員会が生まれたものと思っているが、当初、先進国の活動を推測しながら手探りで進めてきた頃から思えば、もはや世界にも類を見ないユニークな作業委員会に育っており、大学からの参加も増えている。原子力全体が不当ながら世界的に逆風の中にあるので、シグマ委員会活動を進める環境も、予算等を含めて楽観出来ないところはあるものの、中堅・若手委員の志気も高いことを中嶋君への慰めとしたい。この 3 月の原子力学会年会で核データ部会が発足した。それによってシグマ委員会活動が直ちに影響を受けるような関係ではないと思うが、学会の核データ部会の活動がシグマ委員会活動に対して広い視野からの刺激や支援となり、その逆もあるといった状況を期待しているところであるが、中嶋君の指導力がもう得られないことが寂しい。

中嶋君が逝去された翌日の日曜日の夜に伏見先生からお電話を頂いてあわてた。彼の訃報を知っているかのご下問に、存じているとお答えしたが、先生は中嶋君が付き合いの広いタイプとは思っておられないようで、連絡が滞りなく行われているかを気遣っておられたのである。シグマ委員会と法政大学のことにふれ、それほどご心配はいらないと思うと申し上げたが、この 6 月には 91 才になられる大先生のお気遣いが有り難く恐縮した。横浜にお住まいの先生は立川での葬儀にも出席された。中嶋君のために、恩師の有り難さをつくづく思った。

中嶋君は人生の後半を生まれ育った立川に住まい、長患いでなく、ご家族に囲まれて恵まれた大往生だったと思う。ご冥福をお祈り申し上げます。

## 中嶋龍三先生を悼む

武蔵工業大学  
吉田 正

中嶋龍三先生に始めてお会いしたのは、シグマ委員会のワーキンググループ会合の席上であった。Atomic Data and Nuclear Data Tables の表紙に Editor として印刷された R. Nakasima の名を、私は学生時代から既に覚え知っていたから、お会いしたときのこ

とははっきり覚えている。今はもうなくなってしまった NAIG に入社して、1 年もたっていない頃のことであった。それにしても、あれから 30 年。歳月は過ぎ去ってしまえばなんと短いことだろうか。

その後すぐ、シグマ委員会に崩壊熱評価 WG が発足し、私は  $\beta$  崩壊の大局的理論の生みの親である山田勝美先生の弟子だったこともあって、崩壊データ未知核の半減期や平均放出エネルギーの理論予測を担当することになった。そのときのグループリーダーが中嶋先生であった。当時、崩壊熱総和計算の計算精度は現在の比ではなく、測定値と平均で何十パーセントもずれたりしていた。これを改善すべく、総和計算の為のデータベースをつくるのが新 WG の目的だった。中嶋先生は膨大な数の FP 核種の崩壊スキームをひとつ一つ丁寧に調べになり、細かい字で A 4 の紙がびっしり埋められた大量のデータ集を作られた。やがて、それらが基になり、70 年代の終わりに JNDC FP 崩壊データライブラリー（第 1 版）が完成した。しかし、新ライブラリーを用いた計算結果は全く期待を裏切るもので、測定との一致は逆に大幅に悪くなってしまったのである。時を同じくして総和計算の為の新ライブラリーを完成していたアメリカでも、またヨーロッパでも、同じことが起きていた。「改悪」の原因はなかなか分からなかった。

そんなある日、WG 会合を終え東海から東京に帰る急行電車の車中で、中嶋先生と私はずっとこの「改悪」の原因について議論した。上野に近づく頃には結構アルコールも入っていたが、降りる段になって中嶋先生が「いっそのこと全てを理論計算だけでやってみたらどうだい」と言い出された。これは、崩壊スキームをとことん検討され、その限界をも熟知された中嶋先生の慧眼であった。私は会社に帰るとすぐに計算に没頭したが、結果は大成功で、これによってようやく JNDC FP 崩壊データライブラリーは陽の目をみることになったのである。この結果はアメリカやヨーロッパでも次第に受け入れられていった。

その後も中嶋先生はわが国の崩壊熱研究を先導され、JNDC FP 崩壊データライブラリーの改良から原子炉崩壊熱の推奨値の作成へと進んでいった。その間ずっと、私は中嶋先生と一緒に仕事をする幸運に恵まれてきた。崩壊データを見る目は緻密でわずかな曖昧さも見逃されなかったが、ワーキンググループの運営は柔軟で我々は思うことを好きなようにやることができたのである。また、酔うとよくアメリカ時代の核データグループのリーダーだった K. Way や、E. Wigner の逸話を話した。この二人は崩壊熱研究の本当の草分け (Way-Wigner, 1948) だったのだから、中嶋先生と崩壊熱の縁はすでにアメリカ時代にできあがっていたことになる。

一昨年（2017）の 7 月、私は中嶋先生の後任として、身のほどを越えた重責と思いつつもシグマ委員会の主査を拝命した。その引継を含めいろいろお教え頂きたいと、中嶋先生とお会いする機会を探したが、先生は運営委員会を欠席されるようになった。ご病気のことであった。秋に立川の病院まで伺うと、先生は長谷川核データセンター室長と協力し、

これからの難しい時代、シグマ委員会の隆盛のために努力するようにと語られ、いくつかの具体的なアドバイスを下さった。中嶋先生とゆっくりお話する、それが最後の機会となってしまった。

中嶋先生、長い間、いろいろなかたちで激励し指導して下さったこと、本当にありがとうございます。心よりご冥福をお祈りしております。

## 中嶋龍三さんを悼む

(原研核データセンターOB)

五十嵐 信一

核データセンターの中川庸雄君から中嶋さんのご逝去を知らされ、驚くとともに、1つの時代が去っていくのを感じざるを得なかった。シグマ委員会創立当初から指導的立場にあった人で、私自身も種々な意味でお世話になっただけに感慨ひとしおである。

昨年(1999年)11月の核データ研究会で久々にお会いしたのが最後になった。しばらく入院されていたそうであるが、体調が良くなったので出席することにしたとのことであつた。阿漕ヶ浦倶楽部での懇親会で乾杯の音頭をとられ、まだまだお元気であると思つたのであるが、12月にはまた入院されたと、後で聞かされた。もともとあまり頑健とは言い難いお体ではあつたが、こうも早く訃報に接するとは思わなかつた。

中嶋さんとお付き合いは1963年度の原子力平和利用委託金による核データ整備研究のために設立されたシグマ委員会のワーキンググループで顔を合わせて以来で、シグマ委員会の年数とほぼ同じ永さである。この間、さまざまな所でお世話になった。特にこのワーキンググループでの作業はゼロからのスタートで、皆手探りであつた。作業は高速中性子断面積を計算することを目的にして、光学模型コードの作成、光学ポテンシャル及びポテンシャルパラメータの調査などであつた。このグループでもの中嶋さんはアメリカでの経験を生かされて、アドバイザー的役割をされた。

委託金による作業が済んで、シグマ委員会の活動も軌道に乗り始めると、その中心としての核データセンター的役割を果たすところが必要になってきた。核データニュース通巻100号記念号に書かれているように、JNDCニュースの創刊、CINDAへの協力など、中嶋さんは原研の客員研究員として核データセンターの前駆的活動の開拓に従事された。これらの活動が今日なお続いていることを考えるとその功績は非常に大きいと言わなければならない。

中嶋さんの専門対象は核構造データで、若い頃にはK. Way女史の下で研鑽を積まれた。

その経験を生かして、核分裂生成物（FP）核種の核データ評価活動の初期には励起準位データの整備に尽力された。さらに、崩壊熱評価と JENDL 崩壊熱データファイル作成に尽くされた功績は良く知られている。その反面、核反応データに対してはやや冷たいところがあった。特に、プロジェクト的性格の活動には反対の気分があって、JENDL 作成を目的にした作業計画立案などに対しては関与したがない傾向があった。学問以外の所でのわだかまりなどもあったのかも知れないが、JENDL の作業がシグマ委員会活動の中心として活発化するとともにこの方面の活動とは疎遠になっていったように思える。もっとも、それで逆に崩壊熱の活動に専念できたと言えるかも知れない。

中嶋さんが核反応データに対して冷たかった、または冷たくなったことの原因として、核反応データのデータシート作成活動の失敗があったかも知れない。この活動はシグマ委員会の核データ部会（と言ったと思う）で、入射粒子ごとに色分けしたシートに調査した論文の内容を書き込み、それを継続的にため込んでいく、と言う物であった。当時は情報収集の基礎と考えられ、色分けしたシートを大量に作り、各自担当の粒子について書き込み作業を行った。当初は皆張り切って作業をしたが、作業量が膨大なことと利用目的がはっきりしないことがあって、次第に氣勢がそがれ、ついに活動を止めようと言う意見が大勢を占め、討論の結果、まとめ作業を残して止めることになった。中嶋さんは作業の提案者であり、推進者であったので、かなり落胆されたと思う。中性子には CINDA があり、荷電粒子に対する要求が無いに等しかった当時としてはやむを得ないことであった。しかし、中嶋さんしてみれば、アメリカでの経験を核反応データにも応用しようと言う構想が破れたのであるから、かなり失望されたのだと思う。

そうは言っても中嶋さんの核データに対する情熱が失われたわけではなかった。むしろ、核反応データ以外の分野を開拓しようと言う方向に方針を変えられたと言った方が当たっている。前記の崩壊熱評価のための核構造データや原子炉での核種生成を評価するための核データ研究に取り組まれたのがその証であろうと思う。シグマ委員会活動全体に対する大所高所からの適切な指導も彼ならではのことであった。やや晩年ではあったが、1992 年 7 月から 1998 年 7 月までシグマ委員会の主査をされ、JENDL 以後の核データ活動に指針を与えるべく努力をされ、新しい日本の核データ活動に大きな貢献をされた筈である。

私自身は 1994 年度で核データからほとんど退いたので、その後のお付き合いはあまり無く、健康状態についてもほとんど知らなかった。今になってみると、彼一流の社会批評やら将来展望などを聞かせてもらう機会がもう少し欲しかったような気がするが致し方がない。ご冥福を祈るのみである。やや愚痴になるが、せめてシグマ委員会創立 40 周年くらいまでは元気でいて、昔の思い出話などを聞かせてもらいたかった。シグマ委員会の初期からの歴史を知る人を失ったことはやはり寂しい。

## 中嶋龍三氏の思い出

岡本 浩一

中嶋龍三さんが本年5月6日午前2時25分に逝去されたことを佳子夫人から当日朝の電話で伺って何か体から力が抜けてしまった。昨年、腸のポリープ除去で立川病院に検査入院したときも、中嶋さんからの電話で知らされたが、他には内密にしてほしい、見舞には来ないでほしいとのことであった。お正月には退院したとのことで、またすぐお気に入りの吉祥寺の"まる"で飲めるねと電話で話したりした。本年2月20日に病院から中嶋さん自身の電話で「再度入院したが顔を見たい」といわれ、夫人の了解もとって、次の日21日(月)に立川病院401号室へお見舞にいった。「あちこち切られてね」といいながらも、元気で私の城の写真がCDのジャケットに採用になった、Philips Japanの室内楽名盤シリーズのモーツァルトピアノ四重奏曲第一、第二とドヴォルザークピアノ五重奏曲イ長調を受け取ってくれた。実は中嶋さんが音楽に造詣が深いと知ったのは、ウィーンから帰国後、毎年次男の中嶋祐氏の参加されている東京アマデウス管弦楽団の公演への招待を頂いてからである。この見舞いの時、CINDA活動の通知を原研核データセンターの中川庸雄氏から受け取って嬉しそうな顔をしていたのが、大変印象的であった。私は中嶋さんと会うときは意識的に核データ活動の話題はさけていたので、それについての少ない思い出の一つは、菊地康之氏が亡くなったあと私が「フランスでもオーストリアでも私がやってきたのは核データ活動の国際調整—Co-ordinationで核データ評価などの仕事そのものではないから、日本でのシグマ委員会の仕事はもうそろそろ辞めたい」と言った時に、「そうではない。日本でも今後必要なのは、いろいろの活動の調整であり、辞めようというのはもっての外である」とお目玉を頂いたことである。核データ活動以外の沢山の思い出のうち、1972年の夏、7月7日から10日の間、中嶋さんと当時北里大学図書館に勤めていた森田茂子さんと家内の四人でフランスのドルドーニュ地方を旅行したのは、楽しかった。ジョルジュサンドのノアンの墓地を訪ねたりして大いに語り合った。中嶋さんもこの旅は楽しかったようで、その後もたびたびまた「いこうや」といわれ、私は「いやですね。中嶋さんと旅行にいったら、蜜柑のかわむきまでさせられるでしょうから」とへらず口をたたいたものだった。この1973年には、私ども共通の友人の当時 ENEA の中性子データセンター (CCDN) にいた Alois Schett との再会も喜んでいて。現在修行僧のような生活をしている Schett に中嶋さん死去の悲しい知らせを出したところである。中嶋さんはウィーンでもウィーン大学ラジウム研究所所長だった Prof. Frau Karlick とともに懇意で、彼女の弟子の現 IAEA Nuclear Data Section の Otto Schewerer とともになじみであったので、先日悲しい知らせをとどけたところである。

私が1990年3月にIAEAより停年帰国した際には、日本原子力産業会議に嘱託としての勤めが決まる以前に中嶋さんの世話で法政大学第一教養学部の非常勤講師として、文系の学生に一般物理と物理特講を教えるようにとりはかって頂いた。この授業は日本原子力産業会議嘱託の期間も丸6年間続けられ、おかげで文系の学生に物理学を教えるという願ってもない経験がえられた。この授業用のノートは今も手元にあり、現在でもさらに加筆訂正を続けており、かけがえのない講義ノートになって短波放送での講義にも使った。この授業のおかげで多くの法政の学生諸君との交流ができ、また法政大学の先生がたとの知己が得られたのも有難いことである。また法政関係の先生の集まりの場所、市ヶ谷のバー「プシュケ」は現在も私の憩いの場所のひとつであるが、その鈴木マダムも開店当初からの店の引き立て役だった中嶋さんの亡くなったことをなげいている。この店を法政大学の関係者の溜まり場にしたいのが中嶋さんである。この「プシュケ」も含めて、中嶋さんといえば、私にはどうしても酒の席の思い出が多いのは、中嶋夫人には申し訳ないことである。吉祥寺の店、中央線沿線の多くの店。

話題はどういうわけか、核データの話になることは、ほとんどなかった。私の興味のある「スピノザにはじまる異端の思想」、「聖堂騎士団」などについての私のおしゃべりのよい聞き役になってくれた。この話題に関連して法政大学出版局を紹介してくれたり、いろいろ面倒を見ていただいた。私のこのおしゃべりは残念ながら、完結する前に中嶋さんは遠いところに行ってしまった。名前の龍を「竜」と書かれるのを大変いやがった中嶋さんをまた取り戻したい。

(00/05/17)

## 中嶋龍三さんを偲んで

(株)データ工学  
松延 廣幸

今月7日、読売新聞の訃報の欄を何気なく見た瞬間、そこに中嶋さんの名前を見付け愕然とした。昨年秋の核データ研究会で久しぶりにお会いした時には、手術の後で幾分やつれては見えましたが、話していると元気な時の口調になってきたので、手術が成功して良かったですねと喜び合ったのだったが、今年になってから又、体調を崩されたと聞いて気になってはいたのだが、まさかこんなに早く急逝されるとは想像もしていなかった。

思えば中嶋さんとはシグマ委員会の創設以来37年の長きに互って付合って頂いた。シグマ委員会発足当時は、兎にも角にも測定データの収集が必要と言う事で、全員で雑



誌やレポート類を分担して、対象とするデータを探し出してはデータシートに必要事項を記入してデータ集を作成したのだが、その作成法に関して中嶋さんから懇切丁寧な説明を受けた事を思い出す。彼は当時、シグマ委員会のご意見番とか大久保彦左衛門とか言われて敬遠される向きもあったようだが、判らない点を聞きに行くと非常に親切に教えてくれた。後で知った事だが、中嶋さんは数年前迄、ワシントンのWay 女史の下で核構造データの評価に就て研鑽を積み、帰国されてシグマ委員会に参加された当時は将に研究者として油ののりきった時期ではなかったかと思われる。

シグマ委員会もスタートしてから10年近く経つと、日本でも独自の評価データを作成せねばと言う事が毎回の討議事項となり、その作成方針を巡って激しい討論が交わされた。1973年だったと記憶しているが、シグマ委員会の中にファイル作成WGが設置され、ここで重核の核データ評価を実施してJENDL-1を作成する事になった。その当時、米国のENDF/B-IIは既に1970年に公開されていたが、日本でこれと同様なライブラリーを作るにはどのような方針で取組んだら良いか、WGでも何回となく討論を重ねた。特に、議論が対立したのが、或る領域に多数の測定データが在る場合、評価値をどうして決めるかであった。或る人は平均値を採るのが良いと言い、又、或る者は最も信頼出来る測定データを見付け出して、そのデータに基いて、評価値を決めるべきだと主張して議論は収束しなかった。数日後だったと思うが、この話を中嶋さんにして、彼の意見を求めたところ、彼曰く「評価者たる者、癖の有る評価をせよ」であった。その当時、評価なるものを始めたばかりの筆者にとって、癖のある評価とはどんなものか判る由も無かったが、色々話していくうちに、平均値を採るのは絶対に駄目、自分自身でこれぞと思うデータを探し出して評価曲線を引けと言う事だと判った。

評価に対する取組み方は今でも平均値を採る方法と、特定のデータに着目して評価値を決定する方法とがあるが、いずれが正しいかは一概には言えない。今回のJENDL-3.3の評価でも、重核では同時評価を実施して夫れ夫れの核分裂断面積を導出した。この手法はどの核種にとっても、最も妥当な評価値を見つけ出す優れた方法であるが、本質的には平均値を採る事である。この同時評価の精度を更に高めるには、第1次の同時評価で得られた結果に良く一致する測定データだけを核種毎に集めて再度、同時評価を実施すれば良いのではないかと考える。

話が横道に逸れたが、中嶋さんとは日頃、色々のご意見は拝聴していたが、一緒に仕事をする機会が無く、残念に思っていた。ところが、1980年代後半になって、核種生成量評価WGで使用済核燃料の貯蔵、輸送及び取扱いに係わる遮蔽及び臨界安全性の解析に必要である( $\alpha, n$ )反応及び自発核分裂による中性子収率データを計算する為のデータブックを作成する事になり、2年間程グループリーダーの内藤倅孝氏や故飯島俊吾氏達と一緒に中性子収率データの収集やら評価で作業を共にした。特に、収集したデータの誤差評価は中嶋さんと相談しながら誤差の値を決めていったが、誤差の決定に関しては彼

は非常に慎重であった事を未だによく覚えている。

中嶋さんからシグマ委員会と大学教授としての仕事を引くと、残るのは酒と煙草であろう。時間は遡るが、1965年1月から1年4カ月程筆者はBNLに留学していたが、1965年の5月にBNLで(正式名は忘れたが)核データの会議があり、中嶋さんが日本からその会議に参加された。その時、中嶋さんが 炉物理部長だった Dr.Jack Chernik に掛け合ってくれて、筆者も会議に出席出来る事になり、3日間程中嶋さんと行動を共にした。そして、会議が終わった夜、寮の筆者の部屋で酒を飲んだのだが、幾ら飲んでも飲ましても彼は一向に酔わないのである。遂に翌日の明け方4時頃迄飲んでお開きにしたが、買ったばかりのジョニ黒2本が空になっていた。断っておくが、これは二人で1本ずつ飲んだ訳ではない。筆者はその当時、酒は非常に弱く中嶋さんの2割位しか飲めなかったと記憶している。中嶋さんは、「日本が米国、欧州に伍して核データ活動に参加する為の試験を受けるのだ」との事で、その朝、オークリッジに向けて旅立って行った。

その後、中嶋さんとの酒のおつき合いは彼がシグマ委員会の主査を辞める迄続いた。東海研に泊りがけで仕事に行った時は夕食の後、必ずと言って良い程真砂寮の手前に在った「なぎさ」に付き合わされた。彼は「なぎさ」で我々を相手に、時には髭のマスターやマダムを相手にグラスを傾けるのを無上の楽しみにしているように見えた。不思議な事にビールは絶対に飲まず、酒と言えば日本酒か洋酒であった。

煙草に就ても一徹な面があり、肺気腫になって煙草が吸えなくなるまで一貫して「新生」を吸っておられた。筆者も11年前迄は専らロングピースを吸っていたが、ある時、中嶋さんに勧められて「新生」を吸ったところ、意外にも美味しかったのにびっくりした事があり、以後、時折ピースと交互に吸っていた事を思い出す。しかし、「新生」はテーブルの上で、トントンと叩くとその実長が2/3位に縮んでしまうのには参った。

中嶋さんに就ての思い出は幾ら書いても尽きない気がします。筆者がシグマ委員会で今日迄仕事を続けられたのは、今は既に他界された方々も含めてシグマ委員会の先輩諸氏のお陰であり、中でも特に中嶋さんから受けた恩恵は大きなものであったと深く感謝している次第です。

今は唯、そのご冥福を心よりお祈り申し上げるばかりです。中嶋さんどうぞ安らかにお眠り下さい。

(平成12年5月25日)